



TITLE:

ベルギーの「象徴」としてのルネ  
・マグリット 第二次世界大戦以降  
のルネ・マグリットとベルギー文  
化政策の関係についての考察―(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

利根川, 由奈

---

CITATION:

利根川, 由奈. ベルギーの「象徴」としてのルネ・マグリット 第二次世界大戦以降のルネ・マグリットとベルギー文化政策の関係についての考察―. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19791>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	利根川由奈
論文題目	ベルギーの「象徴」としてのルネ・マグリット — 第二次世界大戦以降のルネ・マグリットとベルギー文化政策の関係についての考察		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ベルギーの芸術家、ルネ・マグリット（René Magritte、1898－1967）が第二次世界大戦後に参加した国際展と彼が手掛けた公共事業作品を主な対象として、マグリットの作品制作時の思想・手法とベルギー教育省による文化政策の狙いの両面から考察を試み、第二次世界大戦後のベルギーにおいてマグリットが果たした役割の内実を美術史と文化政策史の側面から明らかにするものである。</p> <p>第二次世界大戦後の1951年から1966年にかけて、マグリットはタブロー制作に勤しむ一方で多くのベルギー公共事業に携わってきた。たとえば、1951年から1961年にかけてのベルギー王立施設の天井画や壁画、また1966年に王立航空会社であるサベナ・ベルギー航空の広告用絵画《空の鳥》をマグリットが手掛けたことを考慮すれば、1950年代から60年代にかけて、マグリットがベルギーの看板作家としての役割を託されていた様子が窺える。その証左として、現在のベルギー王立美術館館長であり美術史家でもあるミシェル・ドラゲは、1954年に開かれたブリュッセルのパレ・デ・ボザールでの回顧展と、同じく1954年に行われたヴェネツィア・ビエンナーレのベルギー館代表としての展示を通して、「マグリットは国家の象徴となった」と述べている。</p> <p>しかし、マグリットの発言や作品の中にベルギーを直接指し示す要素、特に地域主義の要素を見出すことは難しい。というのもマグリットは「ベルギー美術の伝統」の系譜に自身が置かれるのを否定しており、意図的に自身の作品にベルギーを指し示す要素を入れなかったと考えられるためだ。こうした態度とは反対に、マグリットが多くの公共事業を依頼されたのはなぜだろうか。</p> <p>本論文ではこの問題意識に基づき、考察を行う。</p> <p>第1部では、第二次世界大戦後のマグリットの絵画制作方法と絵画観を明らかにするために、第三者によって「マグリットらしい」絵画と称された《赤いモデル》と、「マグリットらしくない」とされる「陽光に満ちたシュルレアリスム」時代の絵画を検討する。その結果、マグリットが日常のオブジェを用いて鑑賞者の常識や先入観を疑わせることを絵画制作の目的としていたこと、そのための絵画制作手法として「親和力」や「類似」を1930年代から1950年代まで重要視していたことを明らかにしている。そしてこのマグリットのオブジェ観はブルトンのそれとは異なるものであった点で、ブリュッセルのシュルレアリスムの特異性を示したことを指摘するのである。</p> <p>第2部では、第二次世界大戦後のマグリットの同時代的受容に関して、ベルギー教育省の主催した国際展におけるマグリットの扱いを通して検討する。具体的には、マグ</p>			

リットをベルギーの「幻想性」の系譜に位置付けた「ベルギー美術の幻想性—ボスからマグリットまで—」展とアメリカにおける歴史化されたモダニズムの受容、またコンセプチュアル・アートの祖としての受容を利用した「ベルギーの美術：1920-60」展に焦点を当てて考察を行う。その結果、ベルギー教育省からマグリットは、ベルギー美術の伝統性とアメリカにおけるコンセプチュアル・アートなどの前衛性の結び目としての役割を託されていたことが、明らかにされる。

第3部では、第二次世界大戦後、特に1950年代から60年代にかけてマグリットが手掛けた公共事業に着目し、第2部で検討したマグリットの同時代的受容を背景とし、マグリットが戦後ベルギーの文化政策においてどのような役割を担っていたかを明確にする。その際、1957年にマグリットが手掛けたパレ・デ・コングレの壁画《神秘のバリケード》と、王立航空会社のサベナ・ベルギー航空の広告のために描かれたタブロー《空の鳥》を検討する。そして、第1部で検討したマグリットの絵画制作の思想・手法・目的と、公共事業として手掛けられた上記の壁画と広告の制作手法・目的を比較することによって、公共事業の依頼主であったベルギー教育省によるマグリットの制作のマネジメントの内実、またベルギー教育省によるベルギーの国内外に対するイメージ戦略の内実を探る。その結果、マグリットがヨーロッパとアメリカに向けたブリュッセルの宣伝と、植民地主義からの脱却という、美術の枠を超えた社会的役割を付与されたことが明らかにされる。

第4部では、フランドレン地域出身のキュレーター、ヤン・フートのマグリット解釈を参照することで、ベルギー教育省によるマグリットのマネジメント方法が現在にも影響を及ぼしていることを指摘するのである。

そして上記の結果を受け、ベルギーにおける美術史・文化政策史という巨視的視点から今一度マグリットの果たした役割を捉えなおすと、以下の3点が浮かび上がる。

1点目は多文化・多民族国家であるベルギーを代表する人物としての役割である。2点目は、「ベルギー美術史」の独自性を担保する役割である。3点目は、ベルギーにおける美術と産業の蝶番としての役割である。

以上のように、本論文は、ベルギーという国家を通してマグリットを逆照射することで、彼がベルギーにおいて果たした役割の多様さと、マグリットの作品の射程の広さを浮かび上がらせるのである。

(論文審査の結果の要旨)

ベルギーの画家、ルネ・マグリット (René Magritte, 1898-1967) の名はよく知られていようし、彼について書かれたものも数多い。しかし、マグリットが第二次世界大戦後にベルギーの公共事業に携わっていたことを知る人は、ほとんどいまい。まして、政治性や国民性の希薄なその作品から考えるなら、マグリットがベルギーという国家によって国の看板作家として利用されたということなど、思いもよらないかもしれない。ところが、本論文が明かそうとするのは、まさにそのことなのである。以下、本論文の注目されるところを、いくつか挙げていこう。

まず、戦前から戦後にかけてマグリットの絵画制作方法と絵画観が基本的に一貫していたことを、綿密に検証したことである。一方では、戦中から戦後にかけての「陽光に満ちたシュルレアリスム」時代のマグリットらしからぬと評された絵画を検討するとともに、他方では、フーコーやデリダの哲学的な言説をも参照しつつなされた探求によって、みずからの絵画の基本を「親和力」に置くにせよ「類似」に置くにせよ、その基本的な絵画観と制作方法には変化がなかったことが明かされるのである。それだけでも十分に本格的なマグリット論たりえると評価できるほどのこの検証をもって、1950年代以降のマグリットのタブローの展覧会での扱いや公共事業作品を取り上げるための素地とするのである。

つぎに注目されるのは、歴史的に跡づける作業の徹底ぶりである。ベルギーの公共事業のために制作された作品、たとえばベルギー王立施設の天井画や壁画をできうるかぎり現地に出向いて調査するとともに、ブリュッセルのパレ・デ・ボザールでの回顧展やヴェネツィア・ビエンナーレのベルギー館代表としての展示など、ベルギー国内外を問わず行われたマグリット作品の展覧会をも丁寧に洗い出している。

第三に注目されるのは、マグリットをベルギーという国家の複雑性を背景に考察したことである。フランス語圏とフラマン語圏とドイツ語圏からなるベルギーは、多民族国家として、たえず分裂の危機にさらされていたといっていよう。だからこそ、国家的統一を文化的に象徴する何ものかを必要としていた。その必要とする詳細を、展覧会や公共事業、王立航空会社の広告にいたるまで検討しつつ示すのである。

最後に、もっとも注目され評価されるのは、国家と芸術とのいわば生産的な緊張関係とでもいうべきものを明かしてくれたことだろう。両者の関係を考えるに際しては、つい一方に偏してしまう傾向がある。あるときは、国家から芸術への一方的な支配関係を強調する。すると、マグリットはベルギーという国家のかわいそうな犠牲者とされかねまい。またあるときは、国家に対する芸術家の独立性を強調する。すると、国家の要求をはねつけ、みずからの芸術を守り通す英雄的な芸術家像が描き出されよう。しかし、いずれにせよ、あまりにも抽象的とのそしりは免れようもない。芸術家は浮き世離れした聖人ではないのだし、国家の支配権力もまた万全であるところではないからである。本論文の立場は、あくまで特定の社会の中で歴史的に生きる芸術家としてのマグリットを手放さないし、国家の中で生きる批評家の視線や言説を離

れることもない。

芸術家としてのマグリットは、みずからの絵画観と制作方法を基本的に枉げることはなかった。そのことは、たとえば王立航空会社であるサベナ・ベルギー航空の広告用絵画《空の鳥》と、同様のモチーフを描いた絵画とを比較検討することで、明らかにされるとおりである。また、マグリットに対して示されたベルギーの文化政策も、国際的なキュレーターとして知られるヤン・フートのマグリット解釈にまで尾を引くことも、本論文での丹念な追跡によって明かされるのである。芸術と国家とのこのように生産的な緊張関係が成り立ちえたのは、ひとつにはマグリットの絵画に政治的なイデオロギー色や民族色が希薄だったことにもよるだろう。とはいえ、ベルギーにおいてマグリットの果たした役割を美術史・文化政策史という巨視的視点から考察した本論文は、国家と芸術との関係を扱う場合のひとつの模範的な論考となりうるものと評価されよう。

以上のように、本論文は、ベルギーという国家を通してマグリットを逆照射することで、彼がベルギーにおいて果たした役割の大きさと、マグリットの作品の射程の広さを浮かび上がらせるのである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降